１月２日は書き初めの日、「ヒト」、「人」、「人間」

ふと、「人」とか「人間」という言葉が、日常生活の中で頻回に使われ出したのは、いつ頃か、どうしてかを知りたくなりました（「ヒト」の表記は、動物界分類学上が主です）。

早速いつものようにメル友に尋ねたところ、数々の情報をくれましたが、大学で国文学を専攻したメル友からの次の情報が、私には理解し易く、また納得もできました。

【　小学館の『古語大辞典』で調べると、いずれも語例はほぼ平安時代の文章あたりから広く集められていますね。ただ、「人間：《呉音》にんげん」については、仏教語の例があげられているように現在よりも仏教語の色彩が濃いようです。

「人間：じんかん」と読むのは、仏教語の意味をはっきりさせるために呉音と違う発音にしたものと思われます。漢詩などに使われているときにこの音を使います。

「人：ひと」については、日本人がもともと持っていた「やまと言葉」で、もともと広い意味で人間を表す語であったようです。

「にんげん」はやや仏教色のある「漢語」であり、やはり、明治以降、西洋から伝わってきた様々な学問を深める上で、やまと言葉の「ひと」ではなく、学術用語的に用いられやすい漢語の「人間」が、ひとの意味で使用されてきたと考えるのが自然ではないかと思います。

つまり、「ひと」という言葉にはもともとマクロ（広義での人間）の意味があった。西洋から伝わってきた様々な学問を吸収していく上で「ひと」という概念は、哲学でも、心理学でも、法学でも必ず大きなテーマとして出てくるものです。したがって自然界の「動物」とは一線を画した動物としての「ひと」を「人間」と訳し、理解していく。こういう必要から現在のように使われるようになったのではないでしょうか。

「人間」という概念を、それまでとは全く違う重要性を持って考えざるを得なくなったのは明治以降であると思われます。ギリシャ哲学を考える上でも、ヨーロッパの法律学を考える上でも、「人間とは」、「社会の中で人間とは」という概念規定は前提条件として理解すべき問題であるからです。　】